

他者との関係性構築における 閾下単純接触効果についての検討

○三木あかね¹・井川上直秋²・宮城円¹・難波修史¹・中島健一郎¹
(¹広島大学大学院教育学研究科・²島根大学人間科学部)

問題

特定の人に好意を寄せる、あるいは避ける理由を私たちは経験に即して、言い換えれば主観的に判断している。はたして、人の好悪判断の基準は本人が思っているように自覚的なものなのだろうか。閾下単純接触効果 (Kunst-wilson & Zajonc, 1980), すなわち接触した対象を認識しない状況下であっても、反復して接触することで、その対象への好意度が増加する現象を考えれば、必ずしも自覚的とは言えないだろう。

川上・吉田(2013)は、集団メンバーの典型性に焦点を当て、潜在的集団評価における閾下単純接触の効果を検討した。その結果、多くの典型成員に少数の非典型成員が組み込まれた場合に、閾下単純接触の効果が最大化されることを示している。本研究では、この点について確認することを目的とした実験的検討を実施する。

方法

分析対象者 大学生 60名 (男性 28名)。

実験計画 接触割合 (典型 70%条件, 典型 30%条件, 典型 0%条件) を要因とする 1 要因参加者間計画。各条件によっておたく写真 (典型画像) と非おたく写真 (非典型画像) の枚数の割合を変えて呈示した (e.g. 典型 70%条件: 10名の刺激人物写真のうち, 7名おたく写真, 3名非おたく写真)。

手続き パソコンによる判断課題 (接触・測定) の実施および心理尺度への回答を求めた。パソコンによる判断課題は川上・吉田 (2013) の手続きに準じて行った。測定フェイズではおたくへの潜在的集団評価を測定するために IAT を使用した。判断課題終了後、質問紙に記述されている架空の他者への印象評定を求めた。具体的には、自己紹介場面に関する刺激文を呈示した上で、特性形容詞尺度 (下位因子: 活動性, 社会的望ましさ, 個人的親しみやすさ; 林, 1982) を用いてその他者への印象を評定した (20項目, 7件法)。なお、自己紹介文には自身をおたくであると明言する文章が含まれていた。

結果

川上・吉田 (2013) を参考にして算出したおた

く IAT 得点を目的変数として、条件 3(典型 70%条件・典型 30%条件・典型 0%条件)×認識

2(呈示した写真が
Figure 1. 認識の主効果 (エラーバーは標準偏差)。真が見えなかった・見えた) を要因とする 2 要因分散分析を行った結果、認識の主効果が有意であった ($F(1,54)=4.30, p<.05, \eta_p^2=.074$)。下位検定の結果、見えた群より見えなかった群のおたく IAT 得点が低かった ($t(54)=-2.07, p<.05, d=-.574$; Figure. 1)。

さらに、印象評定の各下位因子得点を目的変数として、条件 3(典型 70%条件・典型 30%条件・典型 0%条件)×認識 2(呈示した写真が見えなかった・見えた) を要因とする 2 要因分散分析を行った結果、いずれも有意な関連は認められなかった。なお、おたく IAT 得点と印象評定課題の各尺度得点の相関分析を行った結果、有意な関連は認められなかった。

考察

本研究では、接触割合による閾下単純接触の効果において、川上・吉田 (2013) と同様の効果は認められなかった。しかし、呈示刺激の認識に関しては、刺激が見えた、すなわち単純接触をした場合、おたくへの潜在的な好意度が高かった。

一方、顕在的な好意度の変化に関しては、閾下単純接触および単純接触の効果は認められなかった。閾下単純接触について、顕在指標を用いて検討した Kunst-wilson (1980) や Divin (1989) などの研究に、本研究の知見を併せて考慮すれば、閾下呈示の場合、顕在指標では効果が現れにくい、あるいは現れたとしても操作によっては好意的になったり、非好意的になったりする、言い換えれば調整要因の存在が想定できる。今後は、接触時間や接触対象、使用する顕在指標などの測定方法について検討を重ねた上で考察を行う必要があると考えられる。

